

# Eureka X

六年制通信 No.25 令和4年11月11日(金)号

## 自分の目で確かめる

少し前のユリイカで、人を信じるには長くつき合っ、その人の言動を自分の目で確かめないといけないと、そんな話をしました。この、自分の目で確かめるというのは自分の目を信じることでもあります。別の表現をすると、他人の目を通して人を信じてはいけないということです。しかしこの二つとも、実は大変難しいことなのです。自分の目を信じることも、他人の評価を容易に信じないということも。

私たちには「確証バイアス」と呼ばれる性質があります。バイアス (bias) とは「偏見」、「先入観」という意味ですが、確証バイアスとは自分に都合のよい情報だけを取捨選択して取り入れるというものです。これはいろんな場面で見られますが、最も激しいのは恋愛の初期ではないでしょうか。好きになると、その人の欠点に目が行くのではなく、「きっといい人、いい人に違いない」という強いバイアスがかかりますから、いいところしか見なくなります。いいところがなくても無理やり作って「いい人」にする傾向がありますよね。昔、あんな男、だらしなからやめとき、という親友のアドバイスに「だから、あたしがついていてあげなきゃいけないんじゃないの」みたいなシーンをテレビで観たことがあります。怖いですよね。ここまでいなくても、私たちは思い込みによる確証バイアスを普通の会話で行っています。わかりやすいのは血液型や星座占いです。私はO型の射手座ですが、このことを知ると私の中にそれらしい要素を探し、O型ぽいですよとか射手座だと思いましたとか、そんなことを言われた経験が何度もあります。君たちもあるのではないかな。ですから、様々なバイアスから自由になって、自分の目を信じるというのも結構難しいのですね。

また、こんな心理実験もあります。例えば40人のクラスにゲスト講師が来るとします。初めて会う人ですから、先生が事前に講師の紹介をします。その際、クラスを20人ずつに分け、Aグループにはゲストの講師は「あたたかく、勤勉で、批判力を持ち、決断力もある人」と紹介し、Bグループには「つめたく、勤勉で、批判力を持ち、決断力もある人」と紹介します。そして講義後に講師の印象を各グループに書いてもらおうと、Aグループでは「思いやりがある、社交的、ユーモアがある」、Bグループでは「自己中心的、非社交的、ユーモアがない」という、およそ違った印象になったというのです。すごいでしょ、これ。人に対する印象を形成する特性の中でも、「あたたかい」か「つめたい」かは、中心特性とって大きな影響を持つことが知られています。不思議ですよ。 「知的な、器用な、勤勉な、用心深い、決断力のある」という紹介に「あたたかい」、「つめたい」を加えるだけで、どうしてこれほど印象が変わるのでしょうか。

違うのです。事前に他人の評価を聞いたがために、自分の目が曇るわけです。つい左右されるのですね。自分の目を信じようとしても確証バイアスに陥り、他人の評価を気にしないでおこうとしても中心特性には左右されてしまう。これも人間の弱さだね。

先日「迷える仔羊講座」で読んだ英文の中に **ill-posed problems** という表現が出てきました。これは、 $4 \times 6$  を求めよというような、答えが一つしか決まらない問題ではなく、例えば 24 は何と何の積かといった、複数の答えが考えられるような「不完全な問い」のことを言います。答えは  $3 \times 8$  でも  $2 \times 12$  でも  $1 \times 24$  でも、あるいは  $0.5 \times 48$  でもいいわけです。そしてこのうちどれが最も適切な答えかを定めることはできません。英文は「こういう問題はよくない」と続くのですが、しかし、英文を離れてよく考えてみると、世の中に生じる問題は、そのほとんどが **ill-posed problems** で、やってみないと正解かどうかわからない問題か、あるいは時間が経過しないと正しかったかどうかわからない問題か、そんな問題ばかりだということがわかります。そんな中で正しい判断をしていかなければいけないのですから、案外大人も大変でしょ？

むしろ中高の時代が特殊なのです。君たちの教科書には正しいとされていることだけが書かれおり、それらを学習し、出される問題には必ず正しい解答が用意されています。ここに全く欠落しているのは、教科書を疑い、出題される問題を疑う姿勢です。確証バイアスと他人による印象づけを克服するには、全てを疑ってかかることなのですが、中高ではそういう習慣がつきにくいということも知っておくといいでしょう。

### 今週のおすすめ

・『アフタースクール』 (内田けんじ監督)

今回は映画の紹介です。大泉洋、堺雅人、佐々木蔵之介、常盤貴子、ムロツヨシなど、これで面白くないわけがないですよ。学校の先生役の大泉洋が佐々木蔵之介演じる探偵に引っ張りまわされるのですが、どんでん返し映画として宣伝されていました。確かにボーっと観ていると騙されますよ。ただ、日本ではこれは現実味のない話なのでリアルさには欠けますが、エンターテインメントとしては十分に楽しめます。小さな違和感をあちこちで覚えましたが、それはラストでいろいろ納得のいくように張り巡らされた伏線でした。ですから、二度観るのもアリかも、です。

私は『アヒルと鴨のコインロッカー』の方が騙されましたが、原作を読んでから観たので映画では驚きませんでした。こういう「ラストで種明かし」みたいな映画は原作を読んでから観てはいけませんね。『イニシエーション・ラブ』も読んでから観たので、原作のラスト一行の衝撃を上回るような映像ではなかったと思いましたね。

ラストで驚かせる元祖は『サイコ』ですけど、これはもう有名すぎてネタバレしているかもしれません。他に、洋画でどんでん返しといえば『プレステージ』や『シックス・センス』が面白いですね。私も十分楽しみましたが、何ととってもナンバーワンは『ユージュアル・サスペクツ』だと思います。これはラストシーンで拍手しましたもん。騙してくれてありがたいの拍手です。是非観てごらん。

BGMは パティ・ページ の テネシーワルツ でした…。